

西遊夢錄

(十三)

瀧川規一

蘇國の部

(XIV) ホーリルード宮殿とメリ女皇 (2)

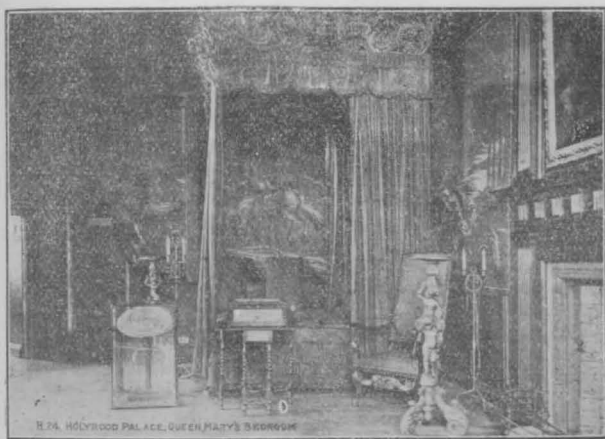
宮殿の外には宗家問題が深刻さと劇烈さとを刻々に増して渦が巻く。殿内ではメリ女皇の一身上に關する結婚問題が起る一ヶ年以上の間は女皇メリの手を握らんとする多くの求婚者が種々の陰謀や交渉を行つた。第一にレンノツクス伯 (The Earl of Lennox) が二十二年の追放から赦されてエ市に歸つて來て女皇に拜謁を許された。黒色のピロードの服に身を裝うた十二人の紳士を先導に立て、一家の制服を着けた三十人の侍を従へて伯は宮殿に乗りつけた。その目的は自分の倅の爲めに女皇に求婚をしたのであつた。この息子はダーンリ卿 (Lord Danley) と呼ばれる人であつて、母親のマーガレット・チエードヤ (Margaret Tudor) によつて英蘭王位の繼承者としては女皇メリ自身の次位に立つ人である。女皇はレンノツクス伯の手から貴重なる贈物を數々受けられた。また四人のメリにも夫々贈物をなして其歡心を得んとした。レンノツクスの赦罪を祝ふ爲めに祝宴はながく引き續

いて行かれた。議會は決議案として侯爵没收財産還附を通過せしめた。其翌月ダーンリは女皇に紹介されるやうになつた。女皇はダーンリを一見されて至極御氣に召されたらしい。

従前見たことのない程の體軀の備つた春のすらりと高い元氣な若者である點に女皇のお目ごとまつた。間もなくダーンリはノツクスの説教に出席したのみならず女皇の腹違ひの兄弟であるモレイ卿 (Lord Moray) や英蘭大使と晩餐を共にし女皇と共にギャリアド師 (Galliard) を踊つた。慇懃と禮讓とに富んだ美男の彼を見て傍觀の男も女も皆女皇の夫君として好適の配偶であると思つた。女皇自身も直にダーンリを戀はるゝやうになつた。女皇時に芳紀二十三であり、青年ダーンリは十九歳であつた。西洋では男女の年齢逆違することなどは有り勝ちのことである。ダーンリと女皇との關係がめでたし〳〵の成果を見んとする晩圖らずもこの芝居を悲劇にすべき役者が一人ならず姿を現はして來た。その一人はピエドモント (Piedmont) の音樂家テヨッド・リッチヤ (David Riccio) と云ふ男である。彼は翌年に女皇の秘書役に任せられた。他の一人は佛蘭西から歸國の許可を得たホスウェル

伯(Barl of Bothwell)である。

一方女皇は美男のダーンリを戀ひ慕はれる。世間の噂話が
高くなる遂には秘密結婚が済んだとさへ噂するに至つた。夏
七月の中頃、夕の八時に女皇は宮殿を出られてダーンリと共
にセトン(Ston
ton House,
Haddington,
East
Lothian)に



行かれて二日
滞留された。
斯くて面白か
らぬ噂が繁く
なるばかりで
あつた。世人
はおのが欲す
るまゝに勝手
なことを云ひ
はじめたが、
今は口に鍵す
る方法もなく
なつた。女皇
はダーンリと

共に還幸の後變装をなして町の此處彼處に忍び歩かれ夜食の
時まで宮殿に歸られぬことすらあつた。宮殿に歸つては尼院
に夜を過され、宴會の席にはダーンリに右腕を支へられ、他
の一人に左腕を支へられて出御された。この光景を目撃した
者の舌は益噂の種を蒔いた。

美しき若き女皇には女性が消え去らぬ。然しながら未來を
托すべき意中の青年との歡樂は非議の種となつた。ノツグス
の如き、木念仁は非議の急先鋒となつた。遅れに遅れた羅馬
法王の指令が漸く到着したがそれは結婚異議のパンであつた。
止むなく蘇國の僧正をして秘かにホルリルド宮殿内の女皇
専用の禮拜堂で結婚の式を擧げざるを得なくなつた。この式
では結婚式の華麗は全くなき女皇自らは死せる夫のドーファ
ンの葬儀にでも列してゐるか如く黒衣の喪服を着けられて
ゐた。形の如く式が終るとはじめて黒服を脱ぎ棄て侍女等の
介添によつて晴やかな服装に着換へられた。式後宴會がある
舞踏がある。結婚の舊習に従つて饒苳きがある。翌朝は傳令
使がダーンリを蘇國王ヘンリとして諸侯の前に觸れ廻つた。
今後はヘンリ王及び女皇メリの名宛にて凡ての手紙が送らる
可きであると宣言された。然し貴族等は何人も返答をしなかつたと云ふ。

女皇の前途には悲劇の幕が切つて落されるやうになつた。
第一の幕は女皇の異腹の兄弟であるモレイ伯が女皇に對して
叛旗を翻したことである。史家は其動機について説を異にし
てゐる。新教徒の蘇國民の女皇としてメリ女皇が舊教の配遇

者を求めることは將來禍害を女皇に及すとの理由でこの結婚に反對したと云ふのが一説である。これに反し女皇自ら疑つた如く伯が新教に入つたのは純なる宗門上の信念から發してゐるのではなく多くは政治上の野心に基いてゐるのである。即ち萬一にも女皇の統治が不可能になる場合には自然おち来る可き王位をモレイ伯が視つてゐたのであるとするのが一説であつた。動機の如何を問はずモレイ伯の叛軍は女皇軍と相會することになつた。然し遂に叛軍は女皇軍の爲めに敗られ伯自らは英蘭に亡命して、この時伯の地位をとつて軍職に就いたのは佛國から再び歸つて來たホスウエル伯である。

女皇夫婦の戀の幻滅の叫ばるゝ日が近いて來た。顯職要路の人々がダーンリに對して抱いて居た好い印象も東の間に消え去つた。ダーンリは酒を飲んで無節制となり粗暴になつた諸侯に對しては暴慢な態度をとつた。下僚に向つては横柄で威壓的であり殘忍であつた。斯くして身邊の阿諛追従者を除いて凡ての人々の憎みを彼は一身に集めた。而かも公々然たる放埒にして野卑な行動は却つて女皇を侮蔑する結果になつた。身自ら國王たる最高位の稱號を得ながら通貨や公の法令には女皇の名を上位にし自分の名を下位にされることをダーンリは心根深く怨に思つてゐた。斯くて自暴自棄の心が自然行動にあらはれるやうになつた。遂にホーリールド宮を餘處にして永らく或は狩獵に或は鷹狩に欲するまゝに從つて日送つた。

この不在中にテザイツ・リツチヨは女皇の信任を得るや

うになつた。而して絶えず醜聞の種を蒔いた。その醜聞の性質たるや時人のこれを口にするを欲せぬ程度のものであつたらしい。一小姓の分際で女皇を支配し從つて一國を支配するやうになることを人々は憎んだ。女皇が不貞であることをダーンリは知つた。父親のレンノックスは女皇を退位せしめリツチヨの首を刎れることを謀り企てた。事止むを得ぬ場合には女皇の生命をも犠牲にせんと欲した。

慘劇の幕は近づいた。肌猶寒き三月の初頃であつた。女皇はアーケイル夫人 (Lady Aeyil) とリツチヨと共に化粧室程の廣さしかない狭い小私室で夜食を召し上つて居られた。親兵隊長のアーサー・アースキン (Arthur Eskine) はローバト・スチニャト (Robert Stuart) 卿と共に伴つてゐた。突然私室の扉が押し開かれるや否や私用の旋廻階段からダーンリは姿を現はした、さてこの階段及びこの私室は案内が拜觀人に向つて得意の辯を奮ふところである。

ダーンリはこれより以前數日間は飲み續けに飲んでゐたのであつたがこの時女皇に近づき女皇の腰を抱いた。國王ダーンリの背後には病氣上がりの蒼白な顔色を見せたルスズエン (Ruhven) 卿が立つて居た。ルスズエンは劍の鞘を拂つた。リツチヨは劍の鞘を拂つた。ルスズエンの様子に恐れをなして女皇の身の陰に匿れた。抑も中世の宮廷詩人たるものは一軍の士氣を鼓舞し陣頭に立つては劍を磨して詩を誦し延内にあつては不朽不滅の詩に名譽を求む可き身である。リツチヨはさりながら一度危険が身に迫ると直に婦人の袖下に忍ばん

としたのであつた。これは中世の武士道の許さぬ處である。モルトン伯のダグラン(Douglas, Earl of Morton)は宮殿の諸方の入口を圍めてゐたが、豫定の如くこの時正面の階段及び大通廊を通つて一隊を率ゐ、謁見の室及び女皇の寢室に押し進んで来た。一隊が階段を靴音高く登り來る時の物騒しさは譬へやうもない程であつた。多人數が夜食の小さい部屋に押し寄せ息も詰るほどであつた。食卓は覆へされる侍女のアーガイル夫人は倒れた燭臺をとつて呆然と立ちすくんで居る臆病者のリツチヨは引きすり出されて叫喚の聲を擧げた。ルスヴェンはこの宮廷詩人をダーンリの部屋に拉致することを命じた他の一人の豪族は女皇の胸にピストルを差し向けて若し女皇が邪魔立てをされるならば火蓋を切ることな辭せぬと云はぬばかりの態度をとつた。最初はリツチヨを法廷に差出して法規通りの審問に附する豫定であつた。然しこの時宮殿内には階下の部屋に女皇の味方であるハントリ(Hundy)及びボスウェルその他の人々が眠つてゐた。彼等を目醒ましては事を遅延さす恐がある爲めに一隊中の誰かや國王の刀帶から短刀をひきぬき、リツチヨの胸に突きさした。これは致命傷でなかつたかも知れぬが次から次へと切りさいなまれて死屍は階下に投げ下され門番の部屋まで運ばれた。リツチヨが殺された場所は謁見室の外扉に近い處であるが今日も猶血痕が黒く残つてゐるとして拜觀人の注意を惹いてゐる。

床には眞鍮板でその位置を示してゐる。
ルスヴェンとダーンリは女皇の部屋に立ち歸つた。國王と

女皇との間に烈しき口論が起る。ダーンリは昨秋以來女皇とリツチヨとのふしだらを責め立てた。この争論が一國の運命を左右する重大事件の起點となる。女皇は既に身重であつて妊娠五ヶ月である。若しダーンリの言にして眞ならば後に英蘇兩國の國王となつたセームス王(Sams VI & I)はダーンリの血を承けずリツチヨの後裔となる。ダーンリ一派の期待は女皇の面前でその寵人を殺害するならば女皇の身の現狀では精神的打撃によつて女皇もまた命を短くされるであらうと云ふことであつた。

豫期に反して女皇は何の支障も受けられなかつた。ダーンリは女皇と兎も角伸直りを餘儀なくせざるを得なくなつた。ノツクスはリツチヨの排除に賛意を表した。女皇の相敵役にリツチヨが優越の地位を占めることは新教派に憂慮の種であつた。リツチヨの殺害は今日の出しぬけ投票を議會ですると同様に敵黨に與へる致命傷ではあるが決して十六世紀の倫理習慣をもつてしては責む可きものではなかつた。メリの味方の人々は秘書リツチヨと同じ運命に陥らんことを恐れて、その晩宮殿を退去した。斯くて幽閉同様の女皇は自己の意志を伴るやうに餘儀なくされた。翌朝アベ・チャーチ教會のリツチヨの新墓にダーンリと共に立つて、秘書リツチヨよりも肥えたる男が一ヶ年も経たぬうちに彼と等しく地下に横はるであらうと云つて、ダーンリの機嫌をとり遂にダーンリをして與黨の人々と絶たしめるに至つた。女皇は侍女等を身邊に置かんことを願つて許された。その方視によつて味方の人々と通

信することが出来た。味方の人々は軍隊を率ゐてエ市に乗り入つた宮殿の護衛兵は女皇が約束通りであると思つたダーンリの確かな言葉を信じて解散した。やがて未明に國王女皇と共に宮殿を逃れ出てグンバア (Dunbar) 城の舊教軍と共に居ることが知れた。身重の状態にありながら二十五哩を一氣に騎馬で走つた女皇の健げさは驚嘆に餘りあるのである。

舊教軍の勢力に支持されて女皇は國王と共にエ市に入つたダーンリとメリとが仇讎睦まじく日を送つたならば蘇國の統治も新舊兩教黨も融和の機運に向ひ得たかも知れないと思へぬではなかつた。然しながら女皇の心はダーンリの二心を憎んだ。ダーンリはリツチヨ殺害の陰謀には何等關係がなかつたと誓つた。然し暗殺者等の誓約書にはダーンリの自署まであり自らは女皇早逝の時は結婚によつて當然王位を継ぎ、陰謀加擔者は如何なる犯罪ありとも處罰を免れ、既に追放された諸侯は召還される等のが約束されてゐた。然るにダーンリのとつた處置はこれ等の加擔者を裏切ることになつた。

更に事態を益紛糾せしめたのは女皇の心が他に轉じてゐたことである。凡ての者が女皇を棄て、女皇が危急に迫られた時に味方となつたのはホスリエル伯のみであつた。伯は放蕩者であり、無鐵砲であつて殘酷な男ではあつたが、女皇に對しては節を變じなかつた。女皇の勢力挽回も一に彼の大膽なこと、有力であつたことによつた。かくて遂に彼は女皇よりその報酬を得るやうになつた。

更に奇怪なる事件が起つた。ホーリルド宮殿に於て女皇

をよく守護したとの廉で宮殿の尖塔の尖端に首を曝らされたのみならず處刑後四肢寸斷された役人が居つた。

女皇はエ市に歸つてもホーリルド宮に入るを好まれなかつた。餘りに陰慘で餘りに屈辱的な場處であると思はれたからである。女皇はエ市の諸處の家に宿を求められた後にエダンバラ城内に入られ、城内で一子を産み落された。それが後にセームス六世ともなりセームス一世ともなつた人である。儲君を得たメリ女皇の心は幾分和いだが、ダーンリは却つて女皇の接近を斥け歐大陸に渡るときへ云ひ出した。

やがて女皇は宮殿に還御されたがダーンリは女皇の味方の人々を放逐するに非ざれば歸らずと云ひ出した。女皇はダーンリが宮殿の門前に乗りつけたのを見て玄關に出迎へ漸くのことダーンリを私室にひき入れた。

ダーンリは翌日樞密顧問會議に臨んだ。その時女皇はダーンリの手をとつて、彼が外國にまで行かなければならない程なことを妾がしたならばそれを明に云つて妾を見棄てずにあつて呉れと懇願した。この時ダーンリは外國行きの意志のなきことを誓ひ女皇が今まで寛容であり愛情に富んでゐたことを述べ終るや否や突然立ち上つて、「女皇よさきやうなら、ながくお目にかゝらないであらう。諸君さきやうなら」の一語をのこしてさつさと立ち去つた。

やがて離婚問題が論議され始めた。幾度か論議されてはまた沙汰止みとなつた。離婚の理由が成立すれば儲君の正常なる権利を奪ふことになるからである。この難境を脱する方法

は自殺するより他に方法がないとまで女皇が云はれた。皇儲に害を與へずしてダーシリから免れる方法は異腹の兄弟のモレイの方寸のうちにあると股肱の臣が奏上した。これを聞いて女皇はこの問題の沙汰止を欲せられた。「自分の名譽及び良心に汚點を付けることを欲しない。只神の意にまかせると女皇は云はれた。その時臣下は意味ありげな返事をした。「事件は吾々の間で處置をしませう。陛下は只善事のみを見られてよろしい、さうすれば議會も亦それを承認しませう」とお

答へした。死にも角にも離婚問題は沙汰止となつた。やがて次の基督降誕祭にはリツチヨ殺害の連累者及び首謀者七十餘人の罪を赦すことに女皇自ら署名された。この大赦は基督教義に基く「他人によくあれかしと願ふ心」の實現であつたが、一面には貴顯の血を求むる殺客をして益々大膽自由にならしめる悪印象を與へたのであつた。濫濫されてゐる陰慘な四圍の空氣は斯くて何時一大爆發となるか判明せぬ程に益々重大化し深刻化して行くばかりであつた。(續)

講 話

岩石學用顯微鏡の使用法

小 川 琢 治

前號から岩石學研究に最も重要な長石類の識別に就いて現在用ゐられてゐる方法及び從來の純粹の曹達石灰兩長石に限られた範圍から加里長石を含むもの及び加里曹達長石へ擴延する爲めに注意すべき事項を述べつゝあるが、本誌の一般讀者には或は該篇に述べる所を十分に理會されぬ人もあるかと想はれ、且つ又た近來自然地理學の研究に當り地殼を構成する岩石の智識を要求する趨勢が